

編集後記

第8号といえば暑い盛りの発行、今年も半ばを過ぎてしまったことになる。時の経つ早さに今さらながら驚きつつ、余りの忙しさにこれで良いのだろうかと思わせられる。そのような中であって毎月8~10編の論文を読ませていただいている。忙しさにかまけていい加減な査読にならないよう自分を戒めるのが大変である。

本誌は邦文論文を中心に成っていることが大きな特徴のひとつだが、近年は論文を外国語(特に英語)で書く傾向が顕著であり、邦文雑誌の投稿の減少と質の低下が問題になっている。自分の研究成果をより多くの人々に向かって発表し認めてもらおうという気持ちは大切なことである。その結果、国際的な一流誌に日本人の、質の高い論文がしばしば掲載されるようになり、それはそれで大変喜ばしいことである。

しかし一方で、日本語の論文も是非大切に少しでも多く書くように心がけていただきたい。言葉はその国の文化の最も基礎的なものであり、人々の生活様式、思考過程などが均一化、国際化の方向に進みつつある中で言葉の壁はなかなか越えられないものである。また、ある意味では越えるというより、それぞれの国民が正しく受け継ぎ、守り抜いていくべきものであろう。学術論文といえども、日本語のルールを無視して書いても、論旨が伝われば良いという考えは許されるべきではない。現時点で使われる最も標準的と思われる用法と文法に準拠すべきである。文学作品ではないので、時には不必要と思われる主語をつけたり、やや受動態が多くなるなど不自然な文体になることも止むを得ない場合もある。しかし、基本的には正しい文法と代々受け継がれてきた用法や表現法を踏まえた日本語で記述してもらいたいものである。

投稿論文の査読に当たっては、当該論文の学問的価値、originality の評価が最も重要であることは言うまでもないが、採用に価する論文であっても上述したような意味から修正せざるを得ないケースが多く見られる。例えば以下のような点について修正を求めることが多い。1) 主語と述語との乖離 2) 現在形、過去形文の混在 3) 能動体と受動態の使い分け 4) 投稿規定の無視などである

いずれにしても私の査読の基本的な姿勢は(編集委員会の姿勢でもあるが)何とか修正可能なものは、繰り返し加筆や訂正を求めながらも、研究内容はもとより日本語表記の standard となるような論文作成に助力することと考えている。そして邦文誌として最も品位と格調のある機関誌を作り上げることに協力しているつもりである。

(小柳泰久)